金子光晴全集

第十三卷

金子光晴全集　第十三巻　著者金子光晴　装幀者司修　発行者
高梨茂　印刷者山田博　発行所東京都中央区京橋二丁目一　中央
公論社　電話(五六一)五九二一　振替東京二―三四　©一九七六
昭和五十一年五月　十　日印刷
昭和五十一年五月二十日発行

評論

Ⅳ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

I　詩と詩論　11
私と詩　11
私と現代詩　21
詩とは何か　29
詩人についての放談　43
僕の詩について　56
僕の詩――私の詩作について　74
現代詩とその方向　81
詩における象徴　90
僕の好きだったことのある詩篇　96
詩の鑑賞　102

高村光太郎の作品 136
Ⅱ 文学的断想 1 138
『歴程』について 138
大衆詩について 140
吉田一穂のことなど 141
戦争中の詩、その他二、三 143
復讐の時代 146
ふるい友人 148
処女詩集出版の頃 150
『楽園』の頃 152
ニヒリズムとアナーキズム 154
ヒューマニズムについて 155
日本の鎖国文学の光栄 157
マス・コミの効用 159
時評一束 161

感想一束 163
善玉・悪玉 165
話術のことなど 168
人間のいない世界 170
過渡期にあって 172
俳句との接触 173
身辺雑感 178
Ⅲ 文学的断想 2 187
家計簿的日記 187
大衆芸能のことなど 189
詩人の画というもの 191
うら盆のサンサシオン 195
可愛いい魔賊たち 197
小さな善人になるな 201
随想一束 203

再開・近代美術館の出来栄え 208
夢 212
人間についてのぶしつけな考察 214
時間をかけて、わがままに 218
正　月 225
珍なもの 226
ねうち 228
青カビ・赤カビ、洋風・和風 230
新春随想 232
地獄の思想と日本人 234
若さとは 242
てこへんな経験 244
Ⅳ　江戸と明治 245
『名ごりの夢』について 245
『武江年表』について 256

明治人 264
V 交友録その他 270
詩雑俎——交友録その序 270
小松原健吉のこと 272
保泉良弼のこと 275
黒田忠次郎のこと 278
富田砕花のこと 281
田中富弥のこと 283
宮崎譲とそのあたり 286
老朋友貘さん 287
秋山清のこと 289
橘家圓太郎のこと 290
山之口貘のこと 291
貘さん御機嫌いかが 292
江戸っ子潤さん 293

福士幸次郎のこと 295
中西悟堂のこと 296
貘さんのこと 297
小野十三郎『奇妙な本棚』について 300
草野心平『わが青春の記』について 305
生田春月編『日本民謡集』について 307
『三才図会』の宇宙観 308
『定本逸見猶吉詩集』について 310
景梅九『留日回顧』について 311
小野十三郎『大阪』について 312
高見順『重量喪失』について 314
山本作兵衛『炭鉱に生きる』について 317
後記 321

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文学的断想

I　詩と詩論

私と詩

私の中にいつから詩が巣食いはじめたものか、私にとっては、そもそもそれがいちばん大事なことなのだ。愛憎の問題もあるがかんじがらめの中から、抜け出してほっとしたい気持と、全く違った魅惑の世界にあそびたいという誘いが、私の詩となれあう気持の発端となるのかもしれない。はじめに詩となれあう気持の素地に、心のうす手な部分があればこそで、そのことは誰しもいなみがたいことであろう。若い日、当代の大家や友人たちの詩にふれて、振り出しの道しるべを得たいというようなことは、むしろ瑣末なことのようである。私の詩を書きだしたころに、白秋、露風がいて、後代の詩人たちは、大なり小なり、その発想とか、口調とか、自分でも知らずに影響を受けてこなかった者はないともいえる。また、『海潮音』だとか、『珊瑚集』とかいう、外国の翻訳詩の影響もある時代には大きく、詩壇がそこから体をなしてきたといっても過言ではない。私にしても、詩という表現法に逢着してからは、白秋、露風の作品を読みもしたし、翻訳の西詩も耽読したことはいっしょであるが、同時代の大家の作品を模倣してつくった作品は、幼稚で、詩とはいわれないようなものだった。

デモクラシーの詩がはいってきた時、その影響を大きくうけて、ホイットマンよりも、イギリスのエドワード・カーペンターの『民主主義の方へ』に感銘し、それまでの私のディレッタンチスムを清算し『赤土の家』という処女詩集を出したが、その詩自体は、カーペンターのエピゴーネンで、とりあげるにも足りないものだ。この寄り道が私にとってそんなに筋違いとは、今でも考えてはいない。作品は失敗したが、この思想の根は今日もまだつよく私の中に蓄積されて、そこからでなければ出発できない人生の大観と、一つの寛大な気流を私の中にしっかりと植えつけていることを否めない。デモクラシーのあとに続いて日本で問題になったのは、エミール・ヴェルハアランであるが、詩の手法上のことは別として、私には、はるかにカーペンターのほうに親近をおぼえていた。それから、私は、フランスのパルナシアン作家、テオフィル・ゴーチエの『エモー・エ・カメ』(『七宝螺鈿集』)と、

ホセ・マリア・デ・エレディアの『トロッフェ』の世界に没入した何年間があったわけだが、それは、私の詩の作法に、教えられるものがあったにせよ、もう一皮むいたところでは、無縁であったといってもいい。

最も心酔した詩人は、ボードレールであったが、本質的に無神論的な私と、カトリックの国で育って、それから離別することに主題をもったボードレールとでは、結局喰い違ったものが多く、最後には他人の顔がのぞいて、仕切り戸をむざんに閉してしまう。

結局、詩人たちから私への系譜というものが立ちにくいのは、私のわがままもあるが、もともとは、私が詩人でないということになりそうだ。しかし、その論法では、身もふたもないことになるから、つとめて私と詩とのなれあいにさかのぼって、私の詩の成立の端緒をさぐり、この稿をなんとかものにしたいと思うしだいである。

私は、小学校の五年までを、京都ですごした。今のような観光客もない昔の京都は、静かで、美しい場所であった。鴨川の水もきれいであった。子供の私は、友達といっしょに磧の小流れに箕をもって、鷹の羽鮹や、時には、腹の赤い鮠などを獲って、びんに入れた。びんの中で泳いでいる魚は、拡大されて、この世のものならず美しい斑紋をひろげるので、あきることなくそれをながめたものだった。私の住んでいた岡崎の近辺は、見渡す限りの菜の花畑であった。菜の花の春らしい十字花弁のふくよかさにも魅了された。若王子の裏山にもよく遊びに行った。そこの渓川には、弁慶蟹がいた。吉田山の小松の葉の繊細な美も、この世にこんな美しいものがあることで驚かされた。御室の桜はどれも小株で、花の種類の変化が、妖しい粉黛のように幼い心をつつんだ。京都には、特別洗練された美意識の世界があって、幼年、少年の私に影響したことはしぜんなことであったと思う。金に縁のない当時の京都人は、わずかな金をつましくしてくらしていたので、京都人は吝嗇だと一般に思われていた。そんな生活の中で京都人は、たいてい風流を楽しみ、香墨のにおいをかいで内なるひろがりを享楽していた。そんな環境の中で育った私は、自然の新鮮さと、年代のおちつきの中に美の調和を見いだす伝統人の習性のようなものをしみこませられ、それがめざめゆく情欲と結びついて、耽美で染められた淫蕩の世界をはやくもあこがれるようになった。そうした子供の世界と、大人の世界との行き違い、いのちいっぱいな情感を、大人たちにかくしまわって、ひそかに醞醸させなければならなかったせつなさが、私をゆがませていった経路にこそ、私の詩の源泉があると思われる。

その次にきたことは、戦争（日本とロシアの戦争）であった。羚羊の毛皮のようになれた心のぬめを、戦争が、むざん

に逆毛立て、それも大人たちの荒っぽい、おしつけがましい戦争への関心が、少年の私をいらだたせ、大人たちの望む条理からはずれることでしか、私は対応の方法をもちえなかった。私が東京へ出てきた時は、東郷大将や乃木大将の凱旋騒ぎの最中であった。東京は、戦勝気分でわき返っていた。血で染まった連隊旗が、群集の歓呼の中を通っていった。どこへ行っても人が行列していた。その人たちのからだの血はわいてつながっていた。日本人がそんなに血に対する積極的なつながりで一つになったことは、この時が最後だろうと思う。大正以後の日本人の心は、表面はともかく、こんな結束を信ずることができなくなった。年少にしてそんな時代を経験したことに、多くの少年たちは、無関心であったが、その危さの上に乗っている内面の危惧が、少年たちの将来への弾機(ばね)になっていたようである。そして少年は、すくすくと延びた。しかし、私の中の「京都」が、おそれをおそれとして受け止めなければならない不幸を背負わされることになった。私は、他の子供たちのようにはふるまえなかった。「東京」に対するはにかみと、意識過重が、私を内面的に追いやると同時に、私の中の反撥しなければならない情感が、「東京」を敵視するかわりに「京都」を憤るかたちで爆発された。私は、私の京都を塗りつぶしてその上に東京で塗り直そうとすることに努力した。それは少年一人の身に余ることであったが、私が中学生となるまでの二年間、私の悪戦苦闘の結果は、「札付少年」ということでしか評価されなかった。学校では私をもてあまし、私を追いはらうために、留置するはずのところを、卒業に切りかえられた。小さな心の中でのそうした波瀾動揺は、私の浮浪児的性格と、セックスを成長させたが、中学校の生活が、ようやく私の波風をしずめた。東京がやっと私のものになったからであろう。劣等感の連続の中に、私の詩が芽をふいたのかもしれない。少なくとも、芽ぶく素地がつくられたのだろうが、不幸にして私は詩人ではなかった。私の関心は、俗事にしかなかった。要するに、餓鬼大将になりあばれまわり禁じられた大人の遊びを享楽し、大人に迫ることであった。少年にして大人を身につけようとするためのアンバランスは、細心と無関心、老成と未熟のみっともない矛盾撞着としてあらわれ、なまじいにそれを感じとるための羞恥が、この身をさいなむことになった。あの幼い時代に見た地獄ほど身をやく地獄を私はその後感じたこともなければ、見たこともない。

私が読書をするようになったのは、十二歳ぐらいからであった。暁星中学校にはいってから、畑仙齢という南画家の息子と最初に仲良くなり、彼から借りた『忠義水滸伝』を読んで、はじめて、案を叩いて、読書のおもしろさを知った。

『水滸伝』にみなぎる気魄と、悲愴な情趣が、少年の私の血をゆさぶった。朱貴の酒場から一筋の響矢とともに、葦間を分けて舟がこぎ出してくる情景がいちばん好きだった。三阮兄弟が、梁山泊の見渡す限りの葦間をこぎながら、うたう慷慨歌に、心にひたひたと迫ってくるものがあった。支那に行きたいという夢がその時めざめた。支那に行くということは、満州の原野を荒馬にのって駆けまわる、神出鬼没な馬賊となることであった。私は自分のからだを鍛えるために、弓道の道場に通い、また、真槍で庭樹を突く稽古をし、父親から苦情をもちこまれた。好んで漢文を読むようになり、しだいに、儒学的教養を身につけることになった。その時の私は、経世家気取りで、口にすることは、現代政治の腐敗であった。『古文真宝』の詩篇、とりわけ、白楽天の流麗な調子に魅了され、「琵琶行」や、「漢皇色を重んじ傾国を思う」を暗誦した。杜甫の「飲中八仙歌」や、文天祥の「正気の歌」を大声で朗詠した。そして、私の最も軽蔑していたものは、雑誌のツマに出ている湖処子とか、泣菫とかいう人たちの新体詩であった。そして、誰にすすめられても、けっして読もうとはしなかった。後年、私が詩を書くようなはめになってからも、新体詩だけは読む気がしなかった。読んでいると不快になるので、今日でもなお、いろいろ全集などが贈られてきても、敬遠して、読んだことがない。軟文学の最たるものと思ったからであろう。何事についても私のそうした偏見はつよかった。中学二年生のころから、こうした儒教一辺倒な傾向がようやくくずれはじめた。しかしなお私は、漢詩以外に詩を書きたいとは思わなかったが、漢詩の平仄を身につけるに至らず、私の漢詩は胡盧をえがくことに終わった。中学二年生ごろから、『遊仙窟』『西廂記』などをあさりはじめ、花鳥風流の情に傾くようになったが、本格的な性のめざめが始まったためであろう。そのころから、漢学の世界はしだいにもの足らなくなり、私は江戸末期の小説類を耽読するようになった。モノマニアの性癖をもっていた私は、通常の活字本を読みあさり、それではもの足りなくなって、中学三年生は、学校にも出席せず、上野図書館や、大橋図書館に通って、原本を読みあさったり、小づかいをもつと、黒門町、末広町辺にあった古本屋をあさり、主として初期の合巻や、黄表紙、こんにゃく本などを買いあさった。まだそのころは、夜店などにもそんな本がよく並んでいたものだ。一年間で私は古書あさりに疲れはてた。種彦や、為永の流儀にならって、現代の世相の人情本、草双紙を創作しようとしたが、友人宗田義久のすすめで、ようやく現代小説への目をひらいた。現代小説といっても、明治以後の小説ということで、やはり、最初にとりついたのは、硯友社の人たちであった。紅葉の『二人比丘尼』から鏡花の『歌行燈』まで、文語体の小説を読みあさったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com